

M. M. P. I. による性格分析と実技指導 (Ⅲ)

— トレーニング・グループについて —

西尾 貫 一

今日、わが国の青少年の体格はよくなったが、体力は体格に応じて向上してはいないことが論議されている。この原因について、東京大学の猪飼教授は、「運動不足によるものと考えられる。人間の身体はトレーニングが欠如するならば機能が落ちるはずである。このへんでわれわれもじっくりと腰をおちつけて日本人の行くさきを考えてみなければならない¹⁾」と言われている。健全な青少年、すなわち、体格もよく、体力もある立派な青少年をつくることは、学校体育に課された大きな使命である。しかし、体力というものは自然に備わるものではなく、訓練し、鍛えてこそ身につくものであるから、われわれ学校体育関係者は、いかにして学生・生徒を訓練し、鍛えて肉体的にも精神的にも向上させていくかということ、じっくり腰をおちつけて考えなければならないわけである。

目 的

体育実技の指導については、従来種々の角度から、研究されているが、オリンピック選手強化のために候補選手の性格を分析し、その性格特性を理解し、強化指導の資料として応用され、集団による治療的分析的取扱いが、学習の能率をあげることに役立つということが考えられている今日では、「教育者として必要なことは、その教育目的を十分に実現するために被教育者の類型を認識することである²⁾」と指摘された早大の戸川教授の言葉も考えあわせて、体育実技の指導においても、

性格分析の方法を、実技指導のための研究材料として考慮し、日常指導の対象となっている学生・生徒の性格を分析し、その性格特性に応じて組分け、技術指導にあたること、すなわち、特別にグループ組織を、あるいは個人指導を、さらには技術の段階別指導等工夫をこらしたならば、指導の上でより効果をあげることができるのではないかと考え、「M. M. P. I. による性格分析と実技指導」についての調査・研究をはじめたのである。

従来の研究経過

まず、その第一段階として、東京大学教養学部 of 学生のうち、泳げない学生のために行われていた水泳講習会に参加した学生たちの、M. M. P. I. による性格分析を実施したところ、水泳講習会に参加した、泳げない学生たちの全体的な傾向は、一般学生に比較して、健康に過度の心配しがちで、悲観的で、興味の型が男性的活動的でなく、人との接触をさげようとする傾向があるようにみられ、別表 a に示すように、各臨床尺度に高得点をとる者が相当多く、全く高得点のない者は、141名のうち僅かに28名(19%)にすぎない状態であった。また別表 b にあるように、常人と変った傾向を示す学生が141名中61名(46%)と、一般学生に比べて多いというだけでなく、相当高率を示していることが判ったので、その結果を昭和38年度の日本体育学会に報告した³⁾。

ついで、昭和39年度の学会には、スキー初心者講習会に参加した同学部の、スキーをはじめて実施する学生たちの性格分析をした結果、この学生たちは泳げない学生達の場合とは異って、全般にノーマルな様相をみせており、別表 a, b で

KAN-ICHI NISHIO: Analysis of Personality with M. M. P. I. and the Education of Physical Training on a Training Group.

みられるように、臨床の各尺度について、高得点の全くない学生が79名中38名(48.1%)という状態であり、とにかく常人と異った傾向を示す学生は79名中15名(18.9%)で、泳げない学生たちの場合に比べて、相当低率であったことを報告した⁴⁾。

そこで今回は、同学部の学生のうち、体育実技の組分けのために実施されている運動能力テスト、別表cにおいて、低い成績をとり、トレーニング・グループという、特別に指導される組に編入された学生達を対象として、M.M.P.I.による性格分析を行い、整理検討した結果について報告する。

調査の対象となった学生は、先の組分けのための運動能力テストにおいて、一種目、あるいは、総合得点で一定基準に達しなかったため、トレーニング・グループに編入された学生で、昭和38年度244名、39年度328名である。この学生たちに対し、それぞれこのトレーニング・グループの指導を担当している体育教官の指示のもとに、M.M.P.I.東大改訂版によるテストを実施し、回答の不完全なもの、および、M.M.P.I.の妥当性の尺度によって不適当と判定されたものを除き、195名(38年度)、277名(39年度)計472名の学生についての調査の結果について、整理されたものである(別表d)。

結果と考察

このトレーニング・グループに編入された472名の学生の平均得点を、日本人の成人男子の標準得点に換算して、平均プロフィールをえがいて全体的傾向をみると、別図eに示す通りで、これを東大の一般学生の平均プロフィールと比較してみると、T検定の結果では、Hs(ヒポコンドリー)については5%の危険率で、D(ラフ病)については1%の危険率で、それぞれ有意差がみられた。したがって全体的傾向として、トレーニング・グループの学生たちは一般学生に比較して、健康について過度の心配しがちであり、悲観的であるといった傾向があるようにみられた。

そこで、このトレーニング・グループの学生個人

個人について、おのおのの臨床尺度によって検討してみると、一般に常人より、アブノーマルな傾向を示す一つの段階であるTスコアの60点、より強く傾向を示す70点をこえているものは別表fにあるように、

Hs (31.9%), D (27.9%), Sc (25.8%),

という状況で、一般学生に比べて高率を示しており、おのおのについて全く高得点のない者は139名(29.4%)という状態であった。

このような結果について、臨床家が通常、正常者と異常者を大別してみている神経症型、精神病型、問題行動型の三つについてみると、別表gに示す通り。

- (a) 神経症患者に顕著な、Hs, D, Hy, Ptの尺度のうち、60点以上の項目が2つ以上あって神経症的傾向を示す所謂神経症型は、
148名(31.3%)
- (b) 精神病のプロフィールに顕著な、Pa, Sc,の尺度のうち、それぞれが60点以上で、精神病的傾向を示すもの、すなわち精神病型は、
19名(4.0%)
- (c) 社会的摩擦を起しやすい、行動上問題のある者のプロフィールに顕著な、Mf, Pa, Ma,の尺度のうち、60点以上の項目が二つ以上あって、この傾向を示すもの、すなわち問題行動型は、
11名(2.3%)

(注) 神経症型の学生のなかで、あわせて精神病型の傾向を示す者が3名、問題行動型の傾向を示す者が24名おり、精神病型の学生のなかに、あわせて神経症型の傾向を示す者が1名いたことを付記しておく。

とにかく常人と異った傾向を示す学生は、472名中178名(37.7%)で、一般学生の場合に比べて多いというだけではなく、相当高率を示しているということが判った。

結 語

以上の結果から、トレーニング・グループの実技指導に当っては、このような性格特性をもった学生たちがいるということを承知して、とくに工

夫することが必要ではないかと考えられる。

一般に、大学生の体育実技指導に当っては、単純な組分けによる、集団指導が行われているのが通常であるが、集団心理の研究者が指摘しているように、集団が集団として効果をあげるのには、成員が楽しく感じ、目標に向かって心が集中しなければならない。たんなる集合体にすぎない集団では、効果を期待することはなかなか困難であり、とくに、ここにみるような、コンプレックスを感じているような学生たちを多く含む場合には、いっそう難事であろう。イギリスのレーストンで、A. S. ニールの経営する、サマーヒル学園の集団指導、あるいはアメリカのトベカでメニンガー財団の経営するサザンスクールの精神医学的寄宿学校の例に徴しても、よりよき指導効果をあげるためには、このような性格分析により、特殊な傾向をもつ学生たちを特別なグループ別、あるいは個人指導といった指導方法を、工夫することが必要になるのではないだろうか。泳げない学生が、一般学生と一緒にプールで泳ぐのを避けようとし、運動能力の低い学生が、トレーニング・グループでは懸命にプレーする実情をみると、いっそうその感を深くするのであるが、「等質グループによる学習形態が、よい効果があるという意見もある反面、集団が消極的傾向の強いメンバーだけで構成された場合には、集団の動きが発展し難く、メンバーのなかには、集団の緊張と不安を緩和し得るような性格、傾向をもったメンバーを含

ませることが望ましい⁵⁾」と言われていることも考慮すると、グループ別についても、簡単に結論を下すことはできない。

したがって、さらにこのような性格分析による調査検討、水泳、スキー学生のように、調査した集団の比較検討、あるいはグループ別指導の実験などを行って、性格分析による実技指導のよりよい方法を見出すことにつとめるつもりである。

注

- 1) 「食生活」1965, 3月号, 「日本人はなぜ小さいか」, p. 44.
- 2) 戸川行男著「性格の類型」, 金子書房, p. 289.
- 3) 体育学研究, 第9巻1号, p. 294.
- 4) 昭和39年度学会報告.
- 5) 霜田静志他著「集団分析」, 誠信書房, p. 167.

参 考 文 献

Booth, E. G.: Personality Traits of Athletes as Measured by the MMPI, Research Quarterly, Vol. 29, 1958.

Dahlstrom, W. G. & Welsh, G. S.: An MMPI Handbook, Minnesota Press.

肥田野直他編: 人事試験総論, 白桃書房.

懸田克射他編: 精神医学臨床検査法, 医歯薬出版.

オルム・ステッド著, 馬場明夫他訳: 小集団の社会学, 誠信書房.

日本グループ・ダイナミックス研究会編: グループ・ダイナミックスの研究, 第4, 5号, 理想社.

末利博著: 新体育学講座10, 11「体育心理学」上, 下, 逍遙書院.

表 a 各尺度の高得点の頻度表

	高得点	Hs	D	Hy	Pd	Mf	Pa	Pt	Sc	Ma	Si	高得点のない者
水泳講習生 参加学生 n=141	70以上	19	10	5	6	5	2	14	15	3	14	28 19.0%
	60~70	44	27	21	15	28	29	22	33	2	31	
	計	63	37	26	21	33	31	36	48	5	45	
	%	44.0	26.0	18.0	14.0	23.0	21.0	25.0	34.0	3.0	31.0	
スキー講習生 参加学生 n=79	70以上	3	2	1	1	0	0	2	2	2	3	38 48.1%
	60~70	1	12	8	10	4	11	13	12	1	11	
	計	4	14	9	11	4	11	15	14	3	14	
	%	5.0	18.0	11.0	14.0	5.0	14.0	19.0	18.0	4.0	18.0	
一般学生 n=128	70以上	6	2	3	1	0	0	4	1	0	14	74 57.8%
	60~70	11	2	1	3	13	3	5	10	1	22	
	計	17	4	4	4	13	3	9	11	1	36	
	%	13.2	3.1	3.1	3.1	10.1	2.3	7.0	8.5	0.7	28.1	

表 b Tスコア高得点臨床診断

	水泳講習参加 n=141		スキー講習参加 n=79		一般学生 n=128	
神経症型	39	27.6%	13	16.4%	25	19.5%
精神病型	14	9.9%	0	0%	9	7.0%
問題行動型	12	8.5%	2	2.5%	0	0%
計	65	46.0%	15	18.9%	34	26.5%

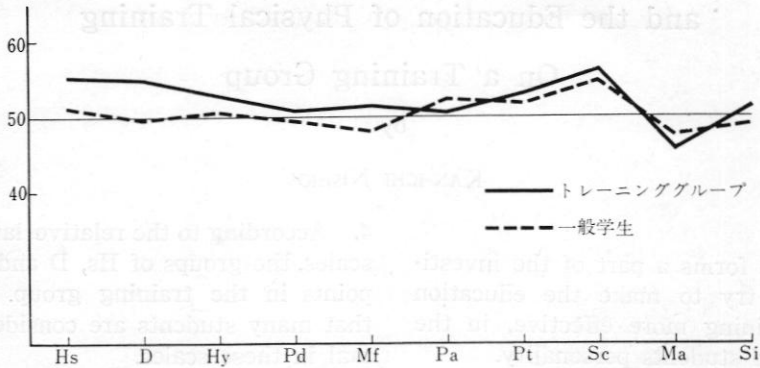
表 c 東京大学教養学部運動能力テスト

1. 垂直跳	46cm
2. サイドステップ(20秒)	32回
3. 腕立伏臥腕屈伸	24回
以上3種目について1種目でもこの基準に達しない者はTグループにはいる	
4. 上記3種目の合計点が125点に達しない者はTグループにはいる	

表 d 運動能力テスト・種目別低位得点者百分比

n=472	全 体		n=472	全 体	
a 垂直跳	25	5.2%	c と d	169	35.8%
b サイドステップ	4	0.8	a b d	2	0.4
c 腕立伏臥腕屈伸	5	1.0	a c d	22	4.6
d 合計点	202	42.7	b c d	2	0.4
a と d	31	6.5	a b c d	2	0.4
b と d	8	1.6	計	472	

表e トレーニング・グループ学生のプロフィール



表f 各尺度の高得点の頻度表

	高得点	Hs	D	Hy	Pd	Mf	Pa	Pt	Sc	Ma	Si	高得点のない者
Tグループ n=472	70以上	44	29	18	14	13	8	26	31	4	18	139 29.4%
	60~70	107	103	88	80	76	47	84	91	21	112	
	計	151	132	106	94	89	55	110	122	25	130	
	%	31.9	27.9	22.4	19.9	18.8	11.6	23.3	25.8	8.2	27.5	
一般学生 n=128	70以上	6	2	3	1	0	0	4	1	0	14	74 57.8%
	60~70	11	2	1	3	13	3	5	10	1	22	
	計	17	4	4	4	13	3	9	11	1	36	
	%	13.2	3.1	3.1	3.1	10.1	2.3	7.0	8.5	0.7	28.1	

表g Tスコア高得点臨床診断

	Tグループ n=472		一般学生 n=128	
神経症的	148	31.3%	25	19.5%
精神病的	19	4.0	9	7.0
行動上問題のある	11	2.3	0	0
計	178	37.7	34	26.5

Analysis of Personality with M. M. P. I.
and the Education of Physical Training
On a Training Group

by

KAN-ICHI NISHIO

Synopsis

1. This report forms a part of the investigations which try to make the education of physical training more effective, in the consideration of students personality.

2. M. M. P. I. was executed to those students who marked low score in a physical ability test and were allotted into a training group, which undertakes a special education for these students. The author compared the results obtained with those obtained in general students.

3. When the mediums of both groups are put into comparison, a significant difference was noticed in respect to Hs and D. The students in the training group showed a stronger tendency to hypochondria and depression.

4. According to the relative ratio in mental scales, the groups of Hs, D and Sc got high points in the training group. This shows that many students are considerably abnormal in these scales.

5. Classified in regard to patterns of clinical diagnosis which examined from all the whole profile, students in the training group are put into a group of abnormal patterns in a higher proportion than general students.

6. Judging from these results mentioned above, it might be necessary to notice that there should be these students whose personalities are out of a normal range in the physical training groups and the appropriate measures should be considered.